

### 1. 平和と文化との関係

文化の違いが紛争の原因となるという考え方は正しいのかどうか——これが平和と文化の関係を考える場合第一に提起されなければならない問題であろう。もちろん、民族文化や地域文化の違いにも関わらず共存共栄してきた社会は歴史的に世界中至るところに存在しており、文化的な違い自体が摩擦や紛争の原因そのものであると考えることは控えるべきであろう。しかし、民族的あるいは文化的違いが経済や政治的利害と結びついた場合、文化が紛争や摩擦を激化させる原因となってきたことは否定できないであろう。したがって文化的違いが経済的、政治的利害の対立と結びつくことをいかに防止するか、そのような意味での共存共栄の条件は何かが問われなければならない。もちろんこれは各国国内ないし地域社会においても当然問われるべき問題であるが、国際社会全体においては、普通の国家内部や民族内や地域内における以上に、人類社会全体のコミュニティ意識、共通意識を育てることが難しいだけに、より深刻な問題となり得るといえる。この問題に対して国際文化交流がどのような役割を果たすべきかが、平和構築と文化との関係でまず問われなければならないことであろう。

その際、人類共通の理念の共有、相互理解の必要性、感性の共有、異なる感性についての理解、それらを通じて違いを許容していくことが人類社会全体の共通意識を育てる上で必要である、という前提が認められなければならないであろう。

### 2. 紛争防止と文化交流

文化交流を相互理解の増進やお互いのアイデンティティについての相対化の育成、という観点から考えると、文化交流は一方で同化・吸収・統合のプロセスであり、同時に独立と抵抗と隔離のプロセスであり触媒である。こうした二面性を持つ文化交流だけに、文化交流が十分その意味を発揮する条件は何か、という点が問われなければならない。

紛争防止という点から考えれば、相互理解そのもの、即ち人類共通の共同体意識の育成自体が紛争防止に役立つと考えることもできる。例えば核廃絶に向けての人類の共通意識の強化のための文化活動があげられよう。(日本のウルドゥー語を勉強している学生たちが「はだしのゲン」をウルドゥー語で演劇化し、その劇を核兵器の保有をめぐってインドと争っているパキスタンで上演することによって、核兵器の被害がいかなるものか広く人々に理解されることに寄与するといった形の文化交流もこの一例といえよう)。

### 3. 長期的な紛争の拡大を防ぐ意味での文化交流

すでになりにかなり長期にわたって紛争が存在している地域において、文化交流が紛争の拡大防止にどのような役割を果たしうるかについて考えると、まず紛争が当事者の文化アイデンティティを歪曲した形で強化している点を是正するという観点がある。即ち、相手方に対する憎しみによって、相手や自分自身のアイデンティティの特定の部分だけが不当に歪曲した形で強化され、それが紛争激化の一つの兆候であるとすれば、それを解きほぐしていくための文化交流の役割が考えられよう。(イスラエルとパレスチナ、双方の少年を招いて広島を見学してもらい、一緒にサッカーゲームを行うという「ピースキッズサッカー」は、この一つの例といえよう)。

また、紛争が長期化すれば、その地域の人々の真の生活や姿が第三者から隔離され不透明になってくるといった問題がある。即ち紛争地域で苦しむ市民の姿よりも紛争そのものが世界に伝わるために、紛争地域の人々と他の地域の人々のつながりが紛争だけに集中してしまい、人々の

実際の生活、心理、感情が世界によく伝わらないという状態が現出する。したがって紛争地域が他の地域から心理的、文化的に隔離されることを少しでも防ぐこと、即ち、紛争地域の市民と他の社会とがつながりをもてるようにすることが文化交流の一つの役割といえよう。(バグダッド市民の演劇活動グループを日本に招待し、公演会を開催する試みなどはこの例といえよう)。

#### 4. 紛争が収まりつつある段階での文化交流の役割

##### (1) 心の癒し

紛争が収まりつつある段階では、軍事のおよび政治的に紛争で傷ついた人々の心の癒しに、いかに文化交流が役立つかを考えることができる。紛争によって対立、抗争した人々、なかんずく、かつては同一の村なり集団に属していた人々が紛争によってきりさかれ、抗争を余儀なくされた場合の心の傷痕は大きい。こうした心の傷を癒すためには双方の気持ちを表現する何らかの文化交流活動が役立つことがあろう。(アチエで国軍に抵抗して戦った人々と、国軍に参加した人々の心の溝を埋め、同じ民族に属しながら紛争であい分かれて争った人々の心の傷を癒すため、共同の演劇ワークショップに参加することを通じて対話の成立を図るという試みはこの一例といえよう。)

##### (2) 紛争の記憶、苦悩とその伝承

物理的な損害は見えやすく、計算しやすいが、苦しみはそれに悩む人々の心が開かれねばあきらかにならない。しかし苦しみを受けた人々はそれを語ることを躊躇する場合も多い。苦悩を経験した人々に自己の表現の場を与え、そうすることによって心の傷痕の「記録」を残し和解のプロセスや将来の紛争防止に役立たせることができよう。そのためにも文化活動が役立つ場合も少なくない。(ベトナム戦争で傷ついたベトナム人の心の苦しみをどのように後の世代に記録し伝えるかについても、文学や演劇、国際シンポジウムなどいろいろな形の活動が考えられよう。)

##### (3) 文化的、民族的な誇りの復権

紛争は自己のアイデンティティの破壊や歪曲につながる場合も多く、また、多くの場合、民族的アイデンティティの対象となっている文化的伝統が破壊されるプロセスである。したがって紛争後の平和構築のプロセスの中では物理的なものにしる、無形の芸能にしる、民族文化の象徴を復権、復興するための活動が、民族の活力を鼓舞するために役立つ場合は少なくない。(アフガニスタンの陶工を日本に招待して、内戦で破壊された陶芸を復興することに役立たせるプロジェクトはこの一例といえよう。)

#### 5. 平和構築のための文化活動についての実施上の問題点

平和構築に実際に文化交流を役立たせようとする、実践上の困難や課題が存在する。まず、現地での必要性や現地の人々の意向をどう把握し、どういうプロジェクトを優先するか、平和構築に役立つ文化交流は多くあっても、どの時点でどれに関与し、何に役立たせるかについての優先度の設定は実際には容易ではない。また、文化交流をいたずらに平和構築と結びつけること自体、文化交流をある意味では専ら政治的目的のための手段として使うことにつながりかねず、どのような形でプロジェクトを実現するかは文化交流の原点に関する問題でもある。いいかえれば文化交流が持つ本来の文化的価値と、それを平和構築に役立たせることとの関係についてのやり方、程度、考え方が問題である。紛争が完全に収束したあとであれば、心の傷跡の存在、文化的誇りの復権の必要性が比較的発見しやすく、また、現地コミュニティと外部の協力者との接点も見つけやすいが、紛争防止や拡大防止段階においては判断がきわめて難しい。現地の人々

の意向や、プロジェクトの形式や優先度設定をどのように行うかの考え方を定める必要がある。

第二に軍事的ないし、安全上のリスクがある。これらのリスクを文化交流活動において誰がどう負うのかの問題がある。一つの方法として、なるべく紛争地域の人々を外に招待し文化交流を行い、紛争地域に戻って文化交流の触媒となってもらおうという方法もあるが、それでは第三者の関与はあくまで間接的になってしまうであろう。他方、紛争地域で“プロテクトド・スペース”を作ってもらおうという方法もあるが、誰がどうやって作るのかという点と考えると文化活動をこえた問題が多くからんでこよう。他方、文化交流を行うことそのものが“プロテクトド・スペース”を作り出し、その中では安全上のリスクが軽減されるという逆説もあり得ることに注意しなければならぬ。

第三には政治的リスクの問題がある。紛争当事者のいずれかから見れば、どちらの当事者にも与しない中立の文化交流があり得るのかという問題があり、そこには常に政治的リスクの問題がからむ。したがって、政治的リスクの回避方法にはどのようなものがあり得るかも考えなければならぬであろう。また、紛争地域における文化交流を行う主体（特に政府関係団体）からすれば、紛争地域に介入する政治的リスクをどのように負うか、安全リスクをどこまでとったかといった、自国内の政治リスクも存在することに注意を要しよう。

第四に、評価の問題が挙げられる。平和構築に文化交流がどのように役立ったかはきわめて測定しがたく、また長期的視野を必要とする。特に軍事的あるいは政治的リスクがあればあるほど、効果をどうとらえるかが、説明責任との関係でも大きな問題として残るであろう。